

## 三戸 公先生記念号によせて

三戸公先生は、一九六一年四月に同志社大学商学部助教から本学経済学部助教として迎えられ、以来一九八七年三月に定年退職されるまで、二六年の長きにわたって本学ならびに経済学部の発展に尽力され、学問の府としての本学の名を大いに高められました。

先生は経済学部および大学院経済学研究科において経営学総論、経営学原理論、経営学方法論の講義を担当され、講義やゼミナールでの学部学生の教育に情熱をもってあたられるかたわら、外国人留学生を含む多くの研究者の育成・指導に努められました。この間一九六三年四月から六五年三月まで経営学科長、一九八三年四月から八五年三月まで大学院経済学研究科博士課程後期課程主任を歴任され、経済学部の教育・研究の充実・発展のために意を注がれました。

先生の学問的業績は学位論文『個別資本論序説』（森山書店、一九五九年）の方法論的研究をはじめとして、産業技術、経営思想、経営労務、所有と支配、官僚制、管理と組織、日本の経営などの経営学研究の大半の領域に及び、数え切れぬ程の膨大な著作に集大成されております。先生のご研究は、わが国独自の経営学研究の方法である個別資本論に立脚して、独占的企業の資本運動の批判的考察をもってはじめられましたが、しだいに一般的な人間の協働関係としての経営や組織体における個人と組織の問題に焦点を据えられ、企業の経済学的研究の枠をこえて「人間の学

としての経営学」の確立とその体系化に力を傾注されるようになりました。とくに欧米の社会・組織原理と日本の社会・組織原理との対比のもとで組織と個人を論じた『公と私』（未来社、一九七六年）に対しては毎日出版文化賞が贈られ、また組織社会の支配構造について論じた『財産の終焉』（文真堂、一九八三年）に対しては経営科学文献賞が贈られ、その業績がたたえられました。先生の鋭い問題意識と独創的な分析方法によって打ち立てられた壮大な研究業績は「三戸経営学」と呼ぶに相応しい体系と内容を持ち、わが国の経営学研究における一つの高峯としてゆるぎない位置をしめております。

先生の学会における活躍もまた刮目に値します。日本経営学会の理事をながく歴任されたのをはじめ、日本労務学会代表理事、組織論学会常任理事、経営哲学学会常任理事として経営学の多くの領域における研究・教育の発展のために活躍されるとともに、国際経営学会大会（一九八六年）に日本経営学会を代表して参加されたのをはじめとして、東南アジアにおける日本的経営システムの適用に関する国際会議や日中企業管理北京シンポジウム等の国際会議に再三参加されるなど、わが国の経営学研究の国際化や日本の経営の普及に努めてこられました。

このように本学経済学部教授としてわが国の経営学研究の発展に大きな足跡を残してこられた先生の同僚として一時期をともしましたことは、私どもの大きな誇りであります。とくに先生が説いてやまなかつた研究者・教育者としての情熱はわれわれ後進にとって範とすべきものであります。立教大学は先生の学術上・教育上の功績によって一九八七年七月に先生に名誉教授の称号を贈りました。

いま、先生の定年退職を迎え、経済学部の発展に尽くされました先生の御功績をながくとどめるため、本号をもって先生の記念号といたします。これからも先生がますますお元気で御活躍されることを希うとともに、これまでとか

わらぬ御助力を経済学部のために賜わりますようお願いしてやみません。

一九八七年一〇月

経済学部長  
久留間 健